
僕は星奈が一番可愛いと思う

スノー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は星奈が一番可愛いと思う

【Nコード】

N6264X

【作者名】

スノー

【あらすじ】

小鷹と星奈がただイチャイチャするだけのお話です。リア充爆発しろ！by夜空

原作3巻がストーリーの起点になります。気楽に楽しんでいただけたら幸いです。

ちよつとタイトルが余りにもまんますぎるので変えてみました↓旧：僕は星奈とイチャイチャする

メール？（前書き）

星奈が小鷹と同じ携帯を隣人部部室で披露した日から1週間経って

メール？

夜、特にやることもなくベッドで適当に寝転がっていると、携帯が鳴った。

FROM 星奈

TITLE ねえ

こだかは今日晩ごはんなに食べたの？

あたしはステーキだったよ（＊＾＾＊）

慣れない手つきで俺は打ち返す。

FROM 小鷹

TITLE RE

久々にすき焼き作った。小鳩のやつ、肉ばっか食ってたな。

FROM 星奈

TITLE RE2

肉？マジで！？

FROM 小鷹

TITLE RE3

ああ、あいつ肉大好きだから。

FROM 星奈

TITLE RE4

肉が大好き？うふふ、えへえ（＊´ω´＊）

FROM 小鷹

TITLE RE5

いや別にお前のことじゃねえぞ!?

…と、まあこんな感じで先日星奈が俺とおそろいのケータイを買ってからというものの、結構な頻度でメールのやり取りをしている。最初は1日に数回程度だったのが、あつという間にその倍の倍以上になった。

こいつのメールの特徴は、名前がひらがなで顔文字が多い。個人的に顔文字は入力が面倒くさいと思う…でも女の子としては自分の気持ちを表現しやすい方法なのかもしれない。

FROM 星奈

TITLE そういえば

今日「BLANNAD」っていうギャルゲーやってみたんだけど、超感動した!

ストーリーもよかったし、キャラクターもみんなかわかったよ(*´、*´)

FROM 小鷹

TITLE RE

お前ほんとギャルゲー好きだな。

FROM 星奈

TITLE RE2

だってかわいい女の子ときゃっきゃうふふできるなんて最高じゃない(´ ˘ ˘ ˘)

FROM 小鷹

TITLE RE3

さいですか。BLANNADね。

FROM 星奈

TITLE RE4

よかったら貸してあげるわよ？あれをやっ
てない人間は人生の9割
を損してるわね！

FROM 小鷹

TITLE RE5

ギャルゲーで満たされる人生ってのもどうかと思うぞ…。

そして星奈からおやすみのメールを受けて俺も眠りにつく。最近はずっとこんな感じだ。

もしかしてこれって……メル友ってやつじゃね？

確か隣人部って友達のいない奴の集まりだよな…。

…。

…。

……あまり深く考えないようにしよう。おやすみ。

メール？（後書き）

第1話以上です。

思わず壁を殴りたくなるような甘々なストーリーを目指してがんばります！

部室にて？

夏休みの昼下がり。小鳩と昼飯を食った後、俺は自室でライトノベルを読んでいた。
ピロリロリーン♪
メールの着信音。星奈からだった。

FROM 星奈

TITLE ヒマ

部室にだれもいない。(T・T)。
こだかきてよ

なんつー簡潔でわかりやすい文章…だが外はアスファルトも焼け付くような灼熱。

……あーもーしゃーねーな！スルーするのもこう…アレだしな。

リビングでアニメに興じる我が妹に出かけることを伝えて、俺は学園へ向かう。

夏休みの昼間ということもあって、電車やバスはガラ空きだった。バスを降りて、うだるような暑さにうんざりしながら歩いていく。

部室のドアを開けると、クーラーのひんやりとした風が流れてきた。実に心地よい。

星奈はソファに座って携帯ゲームをやっている。俺に気付くと、

「あ、小鷹！来てくれたのね」

「メールで呼ばれたらそりゃ…な」

「えへへ」

上機嫌に笑う星奈。不覚にも少しドキツとしてしまった。
俺は目をそらしてそれをごまかすように、

「しっかし幸村もいないとは珍しいな…あいつ夏休みの初日は8時に来てた猛者なのに」

「いろいろ忙しいんでしょ。それよりさ、ゲームしない？家からたくさん持ってきたのよ」

「どんなゲーム？」

「ギャルゲとかエロゲとか…恋愛シミュレーションとか？」

「……もうちょっと普通のやつはないんですかね。つか恋愛シミュレーションはギャルゲと同じだろ」

「贅沢なヤンキーね。じゃあこれは？」

星奈が差し出してきたのは、聖剣のブラックスター（以前部活でいろいろ騒動を巻きおこしたゲーム）の格闘ゲームだった。

格ゲー化もされているとは…やっぱり人気のあるゲームなのかもしれない。18禁だけど。

そんなわけですばらく星奈と格ゲーをプレイしていると、

「ね、ねえ小鷹」

「あ？」

「小鷹はさあ…ぽっちゃりした女の子って、ど、どう思うっ…」

唐突によくわからないことを訊いてきた。

「どう思うって…ぽっちゃり系っていうと、マシコ・デラックスみたいな感じか？あれはちょっと…」

「なんでそんな極端なヤツの話になるのよ！？そうじゃなくて！こ
う…アメガミの利穂子みたいな…」

残念ながらそのアメガミ（間違いなくギャルゲだろう）をプレイし
たことがないので、さっぱりイメージが浮かばない。

「よくわかんねーけど…俺はあんまり好きじゃないかな。かといっ
てやせ気味なのもどうかと思うけど」

「がーん！ー！」

なぜか落ち込む星奈。

「そ、そっか…ぽっちゃりはダメなんだ…」ボソ

「え？なんだよ」

小声で何やら呟いている。もしやこいつ…。

「……………もしかしてお前、体重g」

ピン！

「いてえ！鼻にデコピンすんな！」

「ななな何意味わかんないこと言ってるのよ！こ、このスタイル抜群のあたしが体重なんて気にするわけないでしょー！！」

俺は机の上に置かれたものに目をやる。

それにははつきりと「ダイエットサプリメント」と書かれていた。ジト目で星奈を見る。すると星奈は頬を紅く染めながら白状した。

「そ、そーよ！ダイエットのためにサプリ飲んでるのよ！悪い！？」

あ、開き直った。

「えーと……そんなに気にしなくてもいいんじゃないか？」

「気にするわよ！」

「どれくらい増えたんだよ？」

「あんたよくそんなにストレートに聞けるわね……」

星奈は呆れた眼差しで俺を眺めた後、顔を赤くしてうつむきながら、

「い、いちきろ……」

とかろうじて聞き取れるほどの小声で言った。

「……誤差の範囲内じゃねえか」

「んなわけないでしょ！神であるあたしにとってこれは大問題よ！」

1キロ増えただけでそこまで気にするものなのか？女子の感性はわからん…。

「このままだと絶対夜空に『ははは本当にお前はまるまると太った醜い豚だな！豚肉となってカツと揚げられるがいい』ってバカにされるに決まってるわ！そんなの耐えられない！」

「黙ってれば誰も気付かないだろ…普通に考えて」

「それに…あんたも太った子は死ねみたいに思ってる感じだし」

「いやそこまで全否定してねえぞ！？」

さりげなく捏造する星奈。つか、なんで俺の発言をそこまで気にするんだ…。

「と・に・か・く！あたしは完璧なプロポーションを常に維持しないといけないのよ！」

「はあ」

「何か即効性のあるダイエット法とかないかしら？」

「俺はサプリメントはあんまし効果ないと思うぞ。とりあえず適度に運動するのが一番いいんじゃないか？」

「運動ってどんな？」

「毎朝ジョギングするとか」

夏場だし昼に走るのは危ないと思う色々。

「…あたし最近朝早く起きるのつらいんだけど」

「お前は疲れたサラリーマンかよ…。どうせ夜遅くまでゲームやってんだろ」

「よくわかったわね！」

なぜそこで得意顔になる。

星奈は好きなことにはとことん没頭するタイプだからなあ…。前も目の下にクマ作ってたし。

「んーほかに何かないかしら…。あ、そーだ！ねーねー水泳はどう？」

「あー。悪くないんじゃない？運動量多そうだし」

猛暑が続く中、最適のダイエット方法と言えるかもしれない。

「おっけー！じゃあ明日竜宮ランドに集合ね！」

「おう。……………って、えっ？」

「なに变な顔してるのよ。あんたも来るのよ」

「……………なんで俺も行くの？」

「この前みたいに訳のわからないチンピラがまた来たら困るじゃない

い。ひ、ひとりじゃちょっと心細いし……」ボソ

最後の方が聞き取れなかったけど、要は俺もついていかないとダメらしい。

「まあ…別にいいけど。予定も特にないし」

「決まりね！えへへっ」

嬉しそうに笑う星奈。その真っ直ぐな笑顔はとても…なんというかわかった。

部室にて？（後書き）

というわけで次回はプール話になります。
お楽しみに（´、`）

プール・DE・ダイエット【前編】

そして次の日。

俺は星奈の水泳ダイエットプロジェクトに付き合ったため、竜宮ランドへ向かった。

待ち合わせ場所にはすでに星奈の姿があった。

「…おそい！」

「悪い」

約束の時間には間に合ってるんだけどな…。

それはともかく、以前ここに来たときと比べて今日はやけに人が多い。

「なんか8月いっぱい全ての施設の料金が半額みたいね」

「あーどおりで…」

納得。そりゃ客も多いわけだ…。

目当てであるプールの入場チケットを購入する。

その後水着に着替えるため、俺は星奈と別れ男子更衣室へ入った。

小さな子供たちの怯えた目線を感じながらも（悲しい話だ）、俺は手早く着替えを済ませる。

廊下の壁に背を預けてしばらくぼーっとしていると、

「おまたせ、小鷹」

星奈に声をかけられた。

淡い水色の花柄ビキニ。あいかわらず抜群のスタイルで、思わず見惚れてしまう。

…ん？待てよ。

「全然ダイエットが必要な感じに見えないんだが……」

すらつとした脚、グラビアアイドルのようなメリハリのあるボディライン。

いったいどこが不満なんだろうか。

「はあ？見てわかんないの？」

わかりません。

「まったく…ほ、ほらお腹のあたり、とか……」

顔を少し赤らめて言う星奈。

「別に何も違和感ないけど」

「あーもう！だったらさわってみなさいよー！」

すると星奈は強引に俺の手を取って自分のおなかを触らせた。

「な………！？」

突然のことに驚く俺。おお…何かぷにぷにしてるぞ…。

「ど、どう…？」

「どうと言われましても……」

反応に困る。というかなんで俺は女の子の腹をさわっているんだろ
うか？

ドキドキしつつも、どう答えるべきか頭をフル回転させる。

俺はとりあえず…おなかの『肉』をつまんでみた。

むにゅっ。

「ひゃう！」

「ああ、なるほど…」

確かにこれは…ちょっとだらしないかもしれない。
ふにふに、ふにふに。

「っ、つまむなあ…！」

顔を真っ赤にして、涙目で俺をにらみつけてくる星奈。

いや、最初にさわらせたのお前じゃん…。

そんなアホなやりとりを終え、俺たちはシャワーを浴びていざプー
ルへ。

「混んでるな…」

流れるプール、波のプールは人でごった返しており、水泳に適して
そうな25メートルプールも満員状態。

唯一50メートルプールだけコースが一つ空いていた。

「ここ、使わせてもらうか」

「そうね」

準備運動をし、星奈が勢いよくプールに飛び込んで泳ぎ始める。

俺はのんびりと星奈の泳ぎを眺めることにした。

…にしても上手いなこいつ。フォームもスピードも申し分ないレベル。

この前俺とここに来た時は最初は完全な力ナツチだったというのに…。

星奈は俗に言う天才肌ってヤツなんだろうな…そんなことをぼんやり考えた。

星奈がプールから上がって、今度は俺がそのコースを使う。

何度か往復を繰り返し、俺たちは昼食を取ることにした。

「ちょっと待ってて！あたし今日お昼持ってきたの！」

そう言つて星奈はロッカーへ走っていく。

無垢な少年たちは恥ずかしそうに顔を背けている…わかるわかる、俺もいまだにぶるんぶるん揺れるアレには慣れない。ていうか慣れたらそれはそれでまずいと思う。

そして星奈はランチボックスを抱えて戻ってきた。

かわいらしいネコの絵が描かれたフタを開けると、中には実においしそうなサンドイッチが詰まっていた。

「おお…すげえ……」

思わず驚嘆の声が漏れる。

すると星奈は、してやったりと言わんばかりの表情で、

「ふふん！どう？」

「……これお前が作ったのか？」

「もちろん！」

「……」

「……」

「……ホントに？」

「う、うん……」

「……」

「………ごめんなしい」

しゅんとうなだれる星奈。ですよねー…。

「な、なによその『ですよねー』とでも言いたげな顔は！？あ、あたしが本気出したら中華料理だろうとフランス料理だろうと簡単に作れるんだからっ！！」

別にそこまで求めてねーけど…。

でも星奈は料理に関しても一度教わったらあっという間に修得しそうな感じはする。

ヒマなとき俺が教えてやってもいいかもな。

「じゃ、いただきますーす」

早速俺はツナサンドを口に放り込む…うまい。

全然水っぽくないし、コシヨウも程よく効いている。

他のサンドイッチもまるでプロの料理人が作ったんじゃないかと思えるほどに美味しい。

…まあプロの人が作った可能性は高いけど。
あつという間に半分食べてしまった。

「うまかった…ってあれ、星奈？」

よく見ると星奈は1、2個口にただけで、さっきからほとんどサンドイッチに手をつけてない。

「お前食わないのか？」

「……ねえ小鷹、今日ここに何しに来たかわかってる？」

「えーっと…遊ぶため？」

「違うわよバカ！あたしのダイエットが目的でしょーが！」

素で忘れてた…。

「せっかく運動したのにここでたくさん食べたら意味ないじゃない」

「そうかなあ…」

「そうなのー！」

俺が星奈の提唱する食事制限に疑問を呈していると、

ぐぎゅるるる...

空腹時の効果音が大音量で鳴り響いた。

「~~~~~!!」

顔を真っ赤にしてお腹を抑える星奈。

「.....無理すんなよ」

俺は星奈にタマゴサンドを差し出す。

「.....うつ、もう.....あー！バカバカバーカ!!」

半泣き状態でサンドイッチにかぶりつく星奈。

結局、星奈は残り全部をキレイに平らげたのだった。

プール・DE・ダイエット【前編】（後書き）

後編へ続きます！（・）（

プール・D E・ダイエット【後編】（前書き）

今日は肉（29）の日！深い意味はありません！
それではプール後編ですどうぞ。

プール・DE・ダイエット【後編】

昼食を済ませ、俺と星奈はプールサイドのベンチで休憩していた。プールでは大勢の学生グループがテニション高くはしゃいでいる。楽しそうだなあ…と思いつつふと横を見ると、

金髪の美少女がよだれを垂らしながらこっくりこっくりと舟をこいでいた。

「……おい、星奈」

無反応。

「食べてすぐ寝ると、牛になるぞ」

「誰が牛みたいな乳よ!」

「言ってねえよ!」

どんな聞き間違いだよ…お前は某海賊マンガの赤鼻の船長か。

「てゆうかあたし早く泳ぎたいんだけど。さっきいっぱい食べちゃったし」

「ある程度時間空けてからのほうがいいんじゃないか?すぐ泳ぐのは身体に良くないって聞くぞ」

こういう場所でリバーズはちょっと勘弁していただきたい。

とはいえずっとベンチでボケツとするのもアレなので、ひとまずウォーターライダーに乗ることにした。

タイミングが良かったのか待ち時間はほとんどなく、あっさりと順番がやってきた。

最初は俺から。

青いチューブの中を高速で滑っていく。思ったよりもスピードがあつて少しビビる。

そしてあっという間に出口へ…バシャン！

楽しめる時間は短いが、ウォーターライダーはかなり気持ちいい。

「ん？」

足下を見ると、水中に何かキラキラしたものが落ちている。

何だろう？ペンダント…？

確かめるため屈もうとしたそのとき、悲劇は起こった。

「きゃーーーーー！！！」

星奈の楽しそうな叫び声が聞こえた直後、俺の後頭部に凄まじい衝撃が加わった。

「ぐはっ！？」

顔面から水中にダイブ。

何が起こったのか訳がわからず、浅いプールで必死にもがく俺。

どうにか立とうとするも、三半規管が揺られまくったせいか頭がぐわんぐわんする。

何か支えになるものは…！

むにゅ。

やわらかい何かをつかむ。マシユマロのような感触…マジでなんだこれ？

目を開けると、俺の眼前には真っ赤になって涙目になっている星奈の顔が。

「あ、あんたねえ……な、な、なにしてんのよー……!!」

どうみても俺がつかんでいたのは星奈の胸でした、本当に（以下省略

「……ってええええ!?!」

「いいから早く放してよ! バカ! アホ! 変態!! 痴漢野郎!!」

俺は慌てて後ろへ下がる。

星奈は自分の胸を押さえながら今にも泣きそうな顔で俺をにらみつける。

だがちょっと待つて欲しい、そもそも俺の頭に衝撃（たぶん蹴り）を加えたのは他ならぬこいつじゃないのか？

……でも結果的に星奈の肉（胸）を触ってしまったのは事実。

「…すまん」

とりあえず謝る。

その後、まるで何かを振り払うかのように一心不乱に泳ぎまくる星奈。

俺はプールサイドで待機する。

「にしても…なんつー感触だ」

フニフニでプニプニで… いかん、思い出すと顔が熱くなる。
少し頭を冷やした方がいいかもしれない。

俺は売店でカキ氷を注文した。

…甘ったるい濃い色のシロップ。

カキ氷はやはり家で練乳やカルピスをかけて食ったほうがウマイと思う。

熱を冷まして元のプールコースへ戻ると… 星奈が二人の若い男にからまれていた。

茶髪で色黒でキラキラした派手なアクセサリーをつけまくっている、いかにもチャラチャラした感じの男達。

「…またかよ」

俺はため息をつく。

確かに星奈は見てくれからして華があるし、男の目をひきつける抜群のスタイルをしている。

これだけ人がいれば、そりゃナンパされるのも当然かもしれない。まあでも、この前の一件もあったしその辺は上手くやってくれるだろう…と信じたい。

無視する星奈に対して、しつこく誘い続けるチャラ男。

星奈はみるみるうちに不機嫌な表情になっていく。

…こりゃキレるかもしれないな。不安に駆られた俺は、

「あー… そいつ俺の連れなんだけど」

「は？」

なんだテメエと言わんばかりの鋭い目付きで俺を見る二人の男。

「こだった！」

一方うれしそうにキラキラ瞳を輝かせる星奈。

「つーわけで、そういうことだから」

「…チツ」

勢いに任せて、立ち去ろうとする……が、しかし。

「ふふん、残念だったわね！そもそもあんたたちみたいなチャラチヤラした下品で汚くて野蠻で低俗で下種な人種が神聖にして不可侵でエクセレントで至高の存在であるあたしに声をかけること自体が間違いなのよ！つーかなんでそんなに全身黒くしてんの？オシヤレのつもり？すっごい気持ち悪いんですケド…うわーキモーマジでキモいから近寄らないでくれない？」

あちゃー…。俺は思わずこめかみを押さえる。
ピクピクと怒りで顔を引きつらせるチャラ男×2。
また同じパターンか…。

「おい、兄ちゃん」

銀色の趣味の悪いネックレスをつけた方が俺を呼んだ。

「ちよいと、サシで勝負しねーか」

「へ？」

「もしオレが勝ったらその女には今日一日オレ達とつきあってもらう。その代わりオレが負けたらなんでもするぜ」

「いやいや…」

なんでこの流れでガチンコの殴り合いになるんすか。

「これだけボロカスに言われて、黙って引き下がる馬鹿がいるかよ」

いやまあそれはごもつともですけど…。

しかし俺としては面倒ことは避けたい。

どうしようか…ひとまず謝って星奈を変人扱いしてさっさと離れるのがベストか。

そんなことを考えていると。

「受けて立とうじゃないの！小鷹があんたらみたいなモブキャラに負けるわけないんだから！！」

星奈が傲然と胸を張って、男達にドーンと指を突きつけた。

…いやいや喧嘩するの俺なんですけど！

そして、人目のつかない場所へ移動。

正直俺はこういう用意されたシチュエーションでガチでやり合うのは不得意だ。

最初にハツタリで怯ませて、短期決戦に持ち込むしかねーか…。

そして相手の色黒男はというと…リズミカルにステップを踏みながら、両手を構えている。

こいつ…どうもこの前のチンピラとは色々と違う気がする。

すると、離れた場所で見えていたもう一人のチャラ男が口を開いた。

「あ、言っとくけどそいつ、こないだまでボクサーやってたから」

「……………は？」

直後、俺の腹に信じられない重さのパンチが叩き込まれた――

――。

…。

……。

……………。

ポツリ。

ポツリ。

顔に当たる水滴で意識が戻る。

俺はゆっくりと目を開けた。

「小鷹……………こだかあ……………」

星奈が、マジ泣きしていた。

口の中に広がる血の味。ああそうか……………負けたんだな、俺。

最初の一発を食らったあと、何度か俺は相手の腹に拳を入れることができた。

しかしその腹筋は恐ろしいほどに硬く、まるでダメージを与えられない。

顔を狙ってみるも、あっさりとかわされる。

…そりゃ素人がボクシング経験者に勝てるわけないだろう、常識的に考えて。

はあ。

カッコ悪……。

「ごめんなさい……ごめんなさい………」

星奈の青い瞳から大粒の涙がぼろぼろとこぼれ落ちる。

結局あの男達は俺をノックアウトして満足して帰ったんだろうか？いや、今はそんなことはどうでもいい。それよりも…。

「うぐっ……えっぐ………」

なんで俺は女の子をこんなに泣かせてしまっているのだろう。情けねーなホント…。

とりあえず起き上がるか…あ、無理だ。身体中がすげー痛い。

「あたし……全然……こんなことになるなんて……ひっく……」

泣き続ける星奈。そこで俺は、

「…ふえ？」

星奈のほっぺたをつまんでみた。むにつ。

「大丈夫。俺は、大丈夫だから」

「……ほんふお？」

「ああ」

俺は手を放す。星奈は目を潤ませながら、

「小鷹っ！！」

思いつきり抱きついてきた。

めちゃくちゃ当たってるんですけど胸とか胸とか！！

てかなんか周りにすげー人いるし皆こっち見てるし！！

多大に恥ずかしさを感じつつも、俺は星奈の背中に手を回して応えた。

…まるでカップルみたいだな、これ。

ふと、そんなことを思ったのだった。

帰りのバスの中で星奈から聞いた話。

どうやらあのチャラ男（元ボクサー）は俺をノックダウンさせると、『興ざめだな。……つまんねー』

と言ってあっさりもう片方を連れて帰ってしまったらしい。

何にせよ、星奈が危ない目に遭わなくて良かったと思う。

…代わりに俺がボコボコになったけど。

星奈は自分の家で手当てしたいと言ってきかなかったが、そこまでの傷でもなかったの俺は断った。

そして別れ際。

「ほんとに今日はごめんなさい…。変なヤツが来ても、あたしもう絶対あんなこと言わないから…」

「いやまあ……気にすんなよ」

しよほんと落ち込み気味の星奈に向かって言う。

その『変なヤツ』が誰も来なかったらそれに越したことはないんだけどなー……。

華があり、垢抜けているのに、世間について知らない。

頭がいくせに、感情に任せて気の向くままに行動する。

なんというか、どうも俺の中で星奈は放っておけない存在になりつつある気がする……色々な意味で。

「じゃあ、また……部室で。バイバイ」

「おう」

腫れた頬をさすりながら俺は星奈に手を振った。
そして家に帰った後、小鳩に大層驚かれたのは、今更言っまでもない。

プール・D E・ダイエット【後編】（後書き）

というわけでプール編終了です。

感想・ご意見その他もろもろありましたらどうぞお気軽に（

、（ノ

それではまた次回！

トリックオアトリート！（前書き）

季節ネタを入れてみました。本筋からは数ヶ月後のお話になります。

トリックオアトリート！

夜。俺はキッチンで夕食後の食器を洗っていた。
小鳩はリビングでお気に入りのアニメを視聴中…。いつもの夜の光景だ。

ピンポン。ふと呼び鈴が鳴った。
こんな時間に誰だろう…。珍しいな。
扉を開ける。

そこに、カボチャがいた。

「……………は？」

何を言ってるのかわからねーと思うが、俺も何を言っているのかわからない…。

正確にはカボチャのマスク？を被った人間だった。

「とりつくおあとリーと！」

「……………」

ガチャ。

「ちょっと！なんで閉めるのよ！！」

ダンダンダンとドアを叩くカボチャ人間。
一体なんなんだ…。こんな知り合い俺は知らんぞ。
確認の意味を込めて、もう一度ドアを開ける。

「小鷹のバカ！せっかく来てあげたのになんなのよその態度は！」

やたらと目立つ胸、マスクからはみ出ている長い金髪…。

「何やってんだよ、星奈…」

「は？星奈って誰？あたし柏崎星奈なんて完璧な美少女全然しらないし」

「往生際の悪いやつめ……おりゃ」

俺はカボチャマスクを取った。カポツとな。

「きやつ！？な、なにするのよ変態！！」

やっぱり星奈だった。つかこんなんで変態呼ばわりすんな。

「なんだよその意味不明な格好は」

「え？もしかしてあんた今日ハロウィンって知らないの？」

あ、そういや今日は10月31日。

そーいうことが…まったく気付かなかつたぜ。

「ということだからお菓子ちょーだい」

「へ？」

「ハロウィンは家に来た子供にお菓子をあげるのが慣習なのよ？常

識でしょ」

「いやお前子供じゃないじゃん」

「は？どつからどう見ても子供でしょうが」

こんな胸のかいスタイルの良い子供が居てたまるか。

「お菓子くれないきゃイタズラするぞ」

ウィンクする星奈。魔女っぽい衣装も相まって、不覚にも可愛いと思ってしまった…。

「イ、イタズラってどんな？」

「小鳩ちゃんの寝込みを襲うとか？」

「タチ悪いなオイ！つかお前なら本気でやりそうで怖い！」

わが妹に危害が及んではならないので俺は冷蔵庫から菓子を取ってきた。

「ほれ」

「プッキーだけ？ふんっ…しょっぱいわねえ」

なんでいきなり来られてこんなこと言われないといけないんだろう…。

「とにかくもう用は済んだろ…じゃあな」

「ま、待ってよ！あたし本当はお菓子なんていらないの！その、あたしは…！」

「？」

星奈は急に真剣な顔つきになり、まっすぐ俺の目を見据えて言った。

「小鳩ちゃんが…欲しい」

「帰れ」

ボタン。終了。

「ちょっと…！あたしは本気なのよ…！ねえ聞いてんの…？」

「あんちゃん、なんか玄関うるさい……」

「ああ、すぐ静かになると思うぞ。よし、風呂わかすか」

10分後。

外。

「うう……小鷹のばかあ……小鳩ちゃんじゃないわよ……」

「ほんととは……小鷹と一緒に過ごせたら、と思って来たのに……」

「あいつ…あのバカ……バカバカバアアカ！！」

「ぐすっ……うえぐ……」

ガチャ。

「…玄関先でマジ泣きすんなよ」

「あ」

「とりあえず…上がっていけよ。たいして何ももてなしできないけど」

「……………うんっ！」

1時間後。

「ね、ねえ今小鳩ちゃんがお風呂入ってるんでしょ！？あたしも入っていい？はあはあ…」

「やめろ！！」

やっぱ締め出しておいたほうが良かったかな…。

トリックオアトリート！（後書き）

星奈さんの行動力は異常。そういや小鷹とお肉様以外のキャラのセリフ初めてかもしれない…。ではまた次回。

ボニーテール

夏の夕方。

外の暑さにげんがりしながら、俺はいつもと同じように隣人部部室へやってきた。

扉を開けると、ソファに奇妙な物体が鎮座していた。

「ア、アフロ…？」

俺の記憶が確かならば隣人部にアフロヘアーの知り合いは居ない。つか、いたらこええよ。恐る恐る近づいてみる。

「あ、小鷹！遅いわね、皆もう帰ったわよ」

「なんでこの状況で普通に会話しようとしてるんだお前は…」

やたら整った顔立ちの見覚えのある碧眼美少女が虹色のアフロをかぶっていた。

「ん、なに？もしかしてコレのこと？やっぱりあんたもカツコイイって思う？」

「えっ」

「あたしも最初は何よこのブサイクな髪型！って思ったけど、夜空も理科も幸村も皆カツコイイって言うし…確かにちゃんと見ればかなりイイ感じよねこれ！ワイルドさがあふれてるっていうか」

それどー考えても騙されてるぞ…。ちなみに彼女は学年成績トップ

の天才です。」

「…もしかしてお前、それで帰るつもりか？」

念の為にきいてみた。

「当たり前じゃない」

「没収！アフロ没収！」

「ちょ、な、なにすんのよ！」

さすがに虹色アフロを公衆の面前に晒すという残念行為を看過するのは心が痛む…。

とりあえず人を疑うことを覚えましょう柏崎さん。

星奈の話によると、今日は【髪型を変えてイメチェンしてみよう！大会】だったらしい。

隣人部には珍しい実にガーリッシュな活動内容だなと思った。だが、アフロはないだろアフロは…どこから用意したんだよ。ふとそんなことを考えていると。

「小鷹」

「ん」

「…小鷹はどんな髪型が好きなの？」

星奈がなぜか少し恥ずかしそうにして尋ねてきた。

「俺か？うーん…色々あるしな…」

「ポニテ？それともツインテール？」

「そうだなあ」

「はつきりしないわねもう！そんなだから友達できないのよ！」

どの髪型が一番良いのか答えるのと、何の因果関係があるんだ。

「まったく…しょ、しょうがないわね！優柔不断な小鷹のためにあ
たしが実際にやってあげるわ！」

「はあ」

というわけで。

部屋にある鏡の前に椅子を運び、星奈が座る。

「小鷹」

「？」

「そこにブラシあるでしょ。…と、梳いて」

「ん、ああ…」

小鳩以外の女子の髪を梳くなんて人生で初めてかもしれない。
これはちよつと…緊張するな。

星奈がいつもつけている蝶のような髪飾りを外す。

「……」

「なによ」

「……………誰？」

「柏崎星奈ですけど!？」

「瞬誰かマジでわからなくなりそうだった…。
この髪飾り、地味に存在感発揮してるよなあ。」

「すまん」

「……………いじわる」

ぷくーつとふくれっ面をする星奈。

それはさておき、星奈の髪に触れてみる。

……………なにこのサラサラ具合。

どんなシャンプー使ったらこんなにサラサラになんの？
家で市販の安いシャンプーを愛用している俺には想像できない。

「ふふっ、あたしの神々しい髪に驚いてるみたいね」

「髪だけに神々しいってな。くくっ」

「つね……」

星奈がうんざりした表情をする。……………。

「しかし美容院でも行かないとこんな髪にはならないよな…」

「え？そんなところ行かないわよ。あたしいつも家で切ってもらってるし」

「マジか」

「そーいうのはステラに全部任せてるから」

「ステラ？」

「あたしの家の執事。そういえばあんたまだ会ったことなかったっけ」

…というよりそもそも星奈の家に行ったことが無い訳だが。
入学時は星奈の父親（＝学園理事長）に便宜もはかってもらったし、そろそろ挨拶に行きたいとは思ってるけど。

「てゆうか、早く梳いてよもう」

「あ、悪い」

ゆっくりと丁寧ブラシをかけていく。

シャンプーかリンスかトリートメントか知らないが、ふわっと甘い香りが漂う。

やけにドキドキするな…妹の髪（星奈と同じブロンド地毛）をセツトしても何も感じないのに。

ふと、鏡に写る星奈を見る。青い瞳、白い肌、日本人離れた顔立ち。

なんつーか、まるで人形みたいに綺麗だな。

「なっ…!」

突然顔を真っ赤にする星奈。

「に、人形って……い、いきなり何言ってるのよバカ!」

「へ?」

どうやら思ったことがそのまま口から出ていたらしい…マジっすか。

「でも……小鷹に綺麗って……あう……」

下を向いてなにやらモジモジしている。

……星奈?

「ゴ、ゴホン!さて最初は何の髪型にしようかしら!」

よくわからないが、テンションを無理に上げている感がハンパない星奈さんだった。

○ ツインテール

「いいわよ」

読んでいた本を閉じて、俺はセッティングを終えた星奈のほつを振り返った。

「じゃーん!どう?小鷹」

「おー…」

…正直びっくりした。髪型を変えるだけですげー印象変わるな…。
長いブロンドの髪が左右に分けられ、それぞれ綺麗に髪飾りで留め
られている。

ストレートロングの時よりも、なんというか、少し幼い感じがする。

「なかなかいいんじゃないか」

俺が感想を述べると、星奈は

「べ、べつに嬉しくなんかないんだからねっ!!」

ビシッと指を突きつけてこう言った。

「……………あ、はい」

「『あ、はい』じゃないわよ!? ツインテールって言ったらツンデ
レに決まってるでしょうが!」

あ、そうなんですか…。

確かツンデレってあれだよな、二人のときはツンツンで他に人がい
たらデレデレに…あれ? 逆だっけ?

「でも星奈ってそーいうの似合うよな」

高飛車な雰囲気とそのツンデレとやらの結構マッチしてると思う。

「えっ?」

首を傾げる星奈。

「あたし……いつもそんなにトゲトゲしてるかな……」

「ん？」

「な、なんでもないわよっ」

彼女はぷいっと顔を背けた。

○ ツーサイドアップ

「どうかしら？」

「へえ……」

次は、両サイドの髪の一部をちょこんと結び、残りをまっすぐ下ろしたヘアスタイル。

一見すると上品で清楚なお嬢様、といった印象を受ける。

「つか実際星奈はお嬢様なんだよな……上品で清楚なのはこの際置いておくとして。」

「にしても……ツインテールとよく似た髪型なのに、受けるイメージは全然違うな」

「言っとくけどツインテールとは完全に別物だから。変な誤解しないで」

「俺にはほとんど同じに見えるけど……」

「はー…これだからニワカは困るわね」

ヤレヤレといった表情の柏崎さん。

「ツインテールは昔からのテンプレートなツンデレキャラに多いけど、ツースайдアップはツンデレだけじゃなくて例えばクール系とか無表情系のキャラにもフィットするし、おっとりしたタイプの女の子にも」

知らんがな。

「でね、ツースайдアップにもロングヘアタイプとセミロングタイプがあつて、お嬢様キャラだと前者のケースが多くて、後者は活発で素直な」

「いや、そこまで説明いらねーから…」

放っておくと延々と続きそうだったので俺は慌てて制止した。

○ ポニーテール

「んしょつと…いいわよ、小鷹」

振り向いた俺は………驚愕した。

すげー……めちゃくちや可愛いじゃねーかー！

高い位置でまとめ上げられたキラキラと輝きを放つ金髪。青い蝶の髪飾りが程よいアクセントになっている。

「どう?」

くるっと1回転する星奈。長いテールがふわっと揺れる。
プールでも見ることのなかった星奈のポニテ。

……………素晴らしい。ワンダフル。ビューティフル。

ポニーテール自体はそれほど珍しいヘアスタイルじゃない。むしろ
ありふれた方だと思う。

なのに、なぜ星奈のポニーテールはこんなに魅力的に感じるんだろ
う?

そーいや俺が星奈のギャルゲや小鳩のアニメで見た記憶を辿れば、
ポニーテールをしているのは大体明るく活発なキャラクターだった
… 加えて俺のクラスでも常時ポニテの女子は明るい感じの子が多い
なるほどな… 星奈はポジティブだからな… いろんな意味、方面で
似合うのは当然かもしれない。

「なにににー?もしかしてあんたポニテに萌え萌えだったりするの
?」

ニヤニヤと笑みを浮かべる星奈。

いつもならイラッとくるような態度も、今はかわいいと思える不思議!

いやーほんとに… 星奈、可愛いよ。

「星奈、可愛いよ」

…………… あ。また言葉に出てしまった。

「…………ふえ？」

彼女は目を丸くし、そしてボツと火がついたように顔を真っ赤にして、

「か、か、か、かわ、かわいって、その、あの、えと」

「いや、その、これはポニーテールの星奈が、じゃなくて星奈のポニーテールが」

何を言ってるのかよくわからなくなってきた。

「…どんだけ好きなのよ」

頬を紅く染めた星奈がジト目気味でそう言った。
そして目線を泳がせつつ、彼女は小さめの声で、

「……よ、よかったら、しばらくポニテにしてあげても…いいけど」

「…………マジで？」

「……………うん」

「いやっほっ！」

「…………」

星奈は呆気にとられている様子だったが、俺の気分は実にハイだった。

…恐るべし、ポニーテール。

ポニーテール（後書き）

7巻のカラーイラストがかわいかったので勢いに任せてかきました
（・・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6264x/>

僕は星奈が一番可愛いと思う

2011年11月6日06時30分発行